みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「民族」の復興とある運動家の挫折 (変わるネパールと変わらぬネパール : グローバル化した世界に暮らす, 第5回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5105

ヒンドゥー教の催しに主賓として招かれたカパンギ大臣（中央の眼鏡をかけた男性　2002年）

変わるネパールと変わらぬネパール

グローバル化した世界に暮らす

第5回

国立民族学博物館助教授
写真・文　南真木人

みなみ・まきと　1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『エスノ・サイエンス』（京大出版会　2002年）、『文化の生産』（ドメス出版　1999年）、『アジア読本ネパール』（河出書房新社　1997年）など。

グローバル時代の行く末は、世界の均質化だと思われてきた。コカコーラやジーンズとそれを消費する生活スタイル。最近では携帯電話など世界中で目にしない国はない。だが、他方でグローバル化が進むほど「民族」の意識と主張が高まり、宗教に基づく紛争も激化している。世界は均質化するどころか、どんどん個別化し、細分化しそうな気配だ。

ネパールも例外ではない。ここには政府が公認するだけでも五十九の民族が暮らす。各民族は一九九〇年の民主化後、次々に民族団体を組織し、優遇措置、比例代表制、民族自決、文化とくに母語の維持・普及促進を政府に求めた。なかでもマガール人の協会の活動は急進的だった。

一九九七年、マガール協会は第六回全国大会で「マガール仏教徒宣言」を議決した。その含意は、ヒンドゥー教の僧侶ブラーマン・カーストを崇め、かしづく精神の呪縛から解放されることにある。なぜわれわれを下位に位置づけ、虐げてきた上位カーストに、お布施で支援するのか。これまでブラーマンに頼ってきた人生儀礼をマガール人の手に取り戻さない限り、真の自立はない。そのためには民族をあげてヒンドゥー教（＝カースト制）から離脱し、社会改革をすすめるというのが協会の主張だ。その象徴的な実践は、ネパールの国民的行事とされるヒンドゥー教の大祭ダサインを廃止することであった。

運動は次第にマガール人の間に浸透してきたかにみえた。だが、二〇〇二年のダサインのことである。国王の任命で暫定内閣の大臣に就任した、当時のマガール協会会長カパンギ氏は、慣例どおりに王宮を訪問。ヒンドゥー教のヴィシュヌ神の再生とされる国王の手から吉祥の印ティカを額に受けた。早速メディアは会長の言行不一致を背信だと非難した。彼は「私はマガール人のではなく、今はネパール人の大臣だ。国家の文化に従うのは当然だ」と抗弁したが、過去にイスラム教徒の大臣が任期中国王からティカを受け取らなかった例があり、説得力はなかった。

これを機にカパンギ氏は親国王派の烙印を押され信望を失くした。今年三月マガール協会は分裂し、彼は会長から失脚した。じつはカパンギ氏は、私の友人だけに複雑な思いだ。大臣就任の喜びに浮かれ、国王のティカが「踏み絵」であることに思い至らなかったのだろうか。彼の挫折は民族運動の難しさを物語る。

「民族」の復興とある運動家の挫折